

私はこう
考
える

「遊ぶ」こと
は「学ぶ」
こと?

「遊び」と 「学び」

佐々木 晃

「スペシャルジユースをどうぞ」「ありがとうございます。いただきまーす」。私が容器に口をつけて飲みかけると、「だめだよ。先生。本当に飲んじゃ」と

幼児にあきれられた。すっかり興ざめてしまつた様子である。幼児たちのごつこの会話にジョークを挟むと、「先生、ふざけないで。これは遊びじゃないのよ」と、注意される。

幼児の遊びは不思議で奥深い。一見、矛盾するかのような幼児の言葉の背景には、意識の複雑な重層構造が垣間見える。「私は遊んでいる。これ

は遊び」という意識の層（「地」）の上に、生命力に満ちた幾重もの遊びの物語が「図絵」を織るかのごとく描かれ、展開されていく。

私は幼児の遊びが興味深く、いとおしい。「大人に守られている」安心と愛情に包まれながら、わくわくするような未知の世界と出会つた私の幼児期の記憶につながっていくからなのだろう。幼児の遊びを見取ることの難しさを恐れず、学びや成長という文脈から理解したい、と切に願う私の保育研究の根っこがそこにあるように思う。

事例「ドングリ」（三歳児十一月）

登園すると、カナコはすぐ築山に駆け上がりついく。この日も小柄なカナコはクヌギの根元にあるサツキの植え込みに埋まるようにひざを抱えて、いつもの定位置で物思いにふけるような表情でいた。私も彼女の隣に座して同じようにひざを抱えた。私は、当時、カナコのことが気掛かりであった。鬼ごっこに誘つても「いや」と首を振つた。おやつすら食べない日もあつた。私は友達関係が原因かと心配したこともあつた。家庭での様子を母親に尋ねたりした。

十五年目に明かされた眞実（インタビューより）

「十五年ぶりに幼稚園に行つてみて、あのころのまま、クヌギの木があつたのに驚きました。私は、あの築山でぴかぴかのドングリが落ちてくるのをずっと待つていたんですよね。築山にあるクヌギ

の木から落ちるドングリは、特別なドングリに思えたんです。……中略……みんなで作る基地は遊戯室の積み木、一人の基地は剪定したカイヅカイブキの中だつたのですが、その中央に座ると空がぼっかり見えました。カイヅカイブキと空との境界線がくつきりしていて、その境界線の先から絵本の世界に入つていけるように感じていました。サルビアの花の蜜は甘かつたし、真つ赤なイチゴは長くて細い茎の先にコロンとしていました。折り紙の貝がらつなぎにはまり、切り目を入れて対角線でつなぐとふっくら丸まつたのを覚えています。言いだしたら切りがないほど、不思議に思うことがいっぱいでした」

— カナコ（大学三年生） —

今は大学生になつたカナコの話を聞き、幼児期の遊びが人の学びや成長に深くかかわっていることをうれしく思った。その一方で、行動観察から



は客観的にとらえることのできなかつた私の未熟を痛感した。一人ぴかぴかのドングリが落ちるのを待つカナコの期待やファンタジーに触れ、一緒に遊びの物語を描く楽しみを分かち合いたかつた。私自身も遊び手として遊びに浸り、幼児の意識に触れ共鳴できない限り、良き遊びの理解者にはなれない。そう念じて修養の日々を過ごしている。

事例「ライオンキング」（五歳児 五月）

「シンバこつちよ。今のうちに、お城を直しておぐの。夜になるとハイエナたちが襲つてくるわ」。母ライオンになつているアイが息子ライオン（シンバ）のヤスタカを促して、ムクの枝を運ばせている。

「もう、王様はいなくなつてしまつたの。くよくよしても仕方ないわ。私たちで子どもたちを守るのよ」。アイはそう言つて、娘ライオンのハルカやリナ、ナオコたちと一緒にムクの枝を丸木砦に

結わえ付けている。

丸木砦の周りはムクの木の枝で囲まれている。五人は「城」の二階に身をかがめている。やがて、母ライオンのアイは「お母さんは、何か食べ物を見つけてくるわ。みんな、絶対外に出ではダメよ。いいこと」と言つて、「城」から出ていこうとしている。

私がカメラを持つて前を通りかかると、シンバになつているヤスタカが、「グー。ガオー」と枝のすき間から爪を立てた手を突き出して威嚇してきた。すると、リナが「ダメよシンバ。あれはただの人間。旅行の人なの」と言つてたしなめた。私は「ふー。危なかった。気の立つた子どもライオンだ」と言つて、写真一枚撮つて、場を逃げ去つた。



前日、私たち職員が剪定したムクの枝を使って、幼児たちそれが、思い思いに使って遊んだり、作つたりしていた日の事例である。最初、王様ライオン役のタクヤも一緒にライオンキングごっこをしていて、彼はムクの枝で剣を作り始めて戻つてこなくなつた。このことから王様がいなくなつて母ライオンたちが子ライオンを守るという設定になつたようだ。アイたちは、創作りに熱中して、王様ライオンがいなくなつたことの現実を、ごつご遊びの新たな流れをつくる転機としている。ハイエナたちから身を守る城の修復をすることで、より話にリアリティーが出てくるとともに、ごつご遊びの根拠地の丸木砦と、その周りで行われているムクの木を使ったさまざまな他の活動とを遮断し、自分たちだけの親密なごつこの空間をつくり出している。

幼児たちの遊びは「何かのために遊ぶ」というような目的的なものではなく、それ自体が喜びのためになされている。その喜びに直に向かうが故に、幼児のもつ最高水準の諸能力が総動員され随所に発揮されているようだ。「ライオンキング」の物語との整合性を保ちつつ、現実の友達や遊び場の状態を絡ませながら巧みに編まれていくストーリー、それを演じる言葉や振る舞い、自分たちだけのごつこ空間を創作する技術とアイデア、仲間との駆け引き等、遊びは微視的に見取ると環境や人間関係、言葉や表現等にかかる力を、巨視的に望むと生きるための知恵や作法を育ってくれる。遊びという行為を手掛けりに幼児の意識に触れ、人間を「学び」、共に学びと成長の物語を紡いでいく。この楽しみと恍惚感が「遊び」という意識にまでつながることを夢見てなお修養の日々である。